

令和 8 年度 茨城県 英語教育改善プラン

言語活動を通した、互いの考えや気持ちなどを伝え合う力の育成

- 児童の英語による言語活動を中心とした授業の充実
- 目標と指導と評価の一体化

目標

- ☒ 言語活動
 ☒ 指導と評価の一体化
 ☐ 教師の英語力・指導力
 ☐ 校種間連携
 ☐ ALTの参画
 ☒ ICTの活用
 ☒ AIの活用
 ☒ その他
- (パフォーマンステスト含む) (専科教員含む) (AIを除く)

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ①言語活動を中心とした授業の実践が図られている。
- ②パフォーマンステストを計画的に実施するなど、目標と指導と評価の一体化が進んでいる。

※R6県独自調査結果 数字は%

	やり取り	発表
小5	98.7	98.7
小6	98.5	98.9

未だ改善が必要な点

- ①「言語活動の充実」という視点からは、以下について改善の余地がある。
 - ・必要に応じた練習
 - ・児童が「英語を使いたい」とワクワクする場の設定
- ②授業改善への取組に地域間や学校間の差が見られる。

2. 要因分析

①令和7年度学校教育指導方針において児童の言語活動を中心とした授業づくりについて動画を作成し、全県に周知したことで、教員が言語活動について理解を深め、言語活動中心の授業づくりへの意識が改善したと考えられる。

②県教育課程研究協議会や各種研修会において、パフォーマンステストの意義や実施方法を周知したことで、実施への意識が向上したと考えられる。

①②県の方針や授業改善への取組について県内全ての学校に行き渡っていないことから、英語専門の指導主事がいない市町村教育委員会への支援や教育研究会（任意団体）との連携等が十分でないことが要因と考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

①②「言語活動を中心とした授業の充実」並びに「目標と指導と評価の一体化」の推進

令和8年度学校教育指導方針説明会において、下の資料を基に県の方針を伝えた。また、各種授業公開や研修会において県の方針を踏まえた授業公開を実施していく。

小学校（5、6年生）		外国語
努力事項	具現化のための取組	
1 言語活動を中心とした授業の充実	○言語活動を中心とした授業づくりの充実 ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況を明確にした言語活動を中心とした授業実践 ・指導改善に生かすための学習状況の把握（中間指導の充実） ・言語活動の充実につながるICT（デジタル教科書、AI、遠隔地の人との英語での交流等）の活用 【参考資料】・学習者用デジタル教科書実践事例集 ・はじめての学習者用デジタル教科書	
2 目標と指導と評価の一体化	○各領域の目標と指導と評価の一体化 ・学習到達目標（CAN-DOリスト）の設定と効果的な活用（児童との共有、達成状況の把握） ・単元終末の言語活動と単元計画の工夫改善、パフォーマンスの計画的実施、アセスメント結果の活用	
【外国語教育の推進に向けた動画及び指導資料】 ・文部科学省 mixtchannel 外国語教育はこう変わる！（外国語教育推進室） ・令和5年度全国学力・学習状況調査（中学校英語）調査結果を踏まえた学習指導の改善・充実に関する指導事例集（文部科学省・国立教育政策研究所）		

①「学びのイノベーション推進プロジェクト」において、英語における探究的な学習やICT（生成AI含む）の効果的な活用について研究

①②一定の英語力を有する小学校教員の採用のため、採用試験において次の取組を実施

- ・英語スペシャリスト教員の採用（以下、「スペシャリスト」）
 - …ネイティブ・スピーカーに特別免許状を付与し、教員として採用
- ・英語資格取得済みの者への加点制度

②「wakuwakuスピーキング」（スペシャリスト等による授業配信）

【対象学年】小学校5年、6年

【配信頻度】毎週火曜日、水曜日を基本 ※同じ内容を複数回配信

【内容】全県へのライブ授業配信（約20分間）

令和 8 年度 茨城県 英語教育改善プラン

目標

言語活動を通した、発信力の育成

- 言語活動を中心とした授業の充実
- CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（R7：52.2%⇒R8：60.0%）
- CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（R7：44.6%⇒R8：100.0%）

☒ 言語活動
 ☐ 指導と評価の一体化
 ☒ 教師の英語力・指導力
 ☐ 校種間連携
 ☐ ALTの参画
 ☒ ICTの活用
 ☒ AIの活用
 ☐ その他
 （パフォーマンステスト含む）
 （AIを除く）

1. 目標に対する現状

改善が進んだ点

- ①言語活動を中心とした授業の実践が図られている。
 ②生徒の英語力③英語担当教師の英語力については以下のとおりである。
 ※英語教育実施状況調査 数字は%

	R5	R6	R7
生	53.2	56.2	52.2
教	33.6	41.1	44.6

未だ改善が必要な点

- ①「言語活動の充実」という視点からは、以下については改善の余地がある。
 ・学習状況の的確な見取り
 ・必要に応じた語句や表現などの練習
 ②英語担当教師でCEFR B2レベル以上を取得している教員の割合は順調に増加したが、全国平均を下回っている。

2. 要因分析

- ①令和7年度学校教育指導方針において生徒の言語活動を中心とした授業づくりについて動画を制作し、周知したことで、言語活動を中心とした授業づくりや複数の領域を統合した言語活動の導入への意識が向上したと考えられる。
 ②県の施策が生徒及び英語教員の英語力向上に寄与したと考えられる。

- ①②県の方針や授業改善への取組について県内全ての学校に行き渡っていないことから、英語専門の指導主事がいない市町村教育委員会への支援や教育研究会（任意団体）との連携等が十分でないことが要因と考えられる。
 ②CEFR B2レベル未取得者自身の英語力向上に向けた意識変革が十分でないことが要因と考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

- ①②「言語活動を通した、発信力の育成」を目指す英語授業の推進
 令和8年度学校教育指導方針説明会において 下の資料を基に「言語活動を通した英語授業」の重要性を伝えた。

中学校

努力事項

- 言語活動を中心とした授業の充実
 - 言語活動設定のポイント
 - ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況を明確に設定
 - ・各領域の適切な、言語使用の正確さ
 - ・内容が先、使用する英語は後
- 目標と指導と評価の一体化
 - 各領域の目標と指導と評価の一体化
 - ・学習到達目標（CAN-DOリスト）の設定と効果的な活用（生徒との共有、達成状況の把握）
 - ・単元終末の言語活動と単元計画の工夫改善、パフォーマンステストの計画的実施、アセスメントテスト結果の活用

【外国語教育の推進に向けた動画及び指導資料】
 ・文部科学省 mexchannel 外国語教育はこう変わる！(外国語教育推進室)
 ・令和5年度全国学力・学習状況調査（中学校英語）調査結果を踏まえた学習指導の改善・充実に関する指導事例集（文部科学省 国立教育政策研究所）

外国語

具現化のための取組

- 言語活動を中心とした授業づくりの充実
 - ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況を明確にした言語活動を中心とした授業実践
 - ・バランスの取れた指導の実践（4技能5領域【領域統合型含む】や「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」）
 - ・授業内での教師の英語使用（教室英語に加え、教師自身が生徒と英語でのやり取りを楽しむことが重要）
 - ・言語活動の充実につながるICT（デジタル教科書、AI、遠隔地の人との英語での交流等）の活用
- 各領域の目標と指導と評価の一体化
 - ・学習到達目標（CAN-DOリスト）の設定と効果的な活用（生徒との共有、達成状況の把握）
 - ・単元終末の言語活動と単元計画の工夫改善、パフォーマンステストの計画的実施、アセスメントテスト結果の活用

- ①「学びのイノベーション推進プロジェクト」において、英語における探究的な学習やICT（生成AI含む）の効果的な活用についての研究
 ①「wakuwakuスピーキング」（英語スペシャリスト教員による授業配信）
 【対象学年】中学校1年、2年
 【配信頻度】毎週水曜日を基本 ※同じ内容を複数回配信
 【内容】ある1つのテーマについて話すこと、書くことの授業を全県へのライブ配信（約20分間） 例 中1 小学校の復習
 ②中学校英語担当教師の英語力向上研修
 【対象者】CEFR B2未取得者
 【内 容】資格取得状況調査実施（毎月1日を基準）
 県によるオリエンテーション実施や受験機会設定

令和 8 年度 茨城県 英語教育改善プラン

4 技能 5 領域の総合した言語活動の充実と発信力の育成

- CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると思われる生徒の割合
(R7年度：A2以上 51.4%、B1以上 23.2% ⇒R8年度：A2以上 62%、B1以上 30%)
○CAN-DOLISTに基づく自校でのパフォーマンステスト等を活用し、生徒の英語力を適切に把握する学校の割合増加
(R7年度：42%(実際値) →R8年度：70%(目標値))

☒ 言語活動 ☒ 指導と評価の一体化 ☒ 教師の英語力・指導力 ☐ 校種間連携 ☒ ALTの参画 ☒ ICTの活用 ☒ AIの活用 ☐ その他
(パフォーマンステスト含む) (AIを除く)

目標

1. 目標に対する現状

①CEFR B1レベル相当以上の英語力を取得又は有すると判断される生徒の割合が大きく改善した。

(R6:20.6%⇒R7:23.2%)

②英語担当教師の授業における英語使用状況について、発話の25%以上を英語で行っている学校の割合が大きく改善した。

科目・年度	発話の25%未満	発話の25%以上
英コミ I (R6)	68.0%	32.0%
英コミ I (R7)	20.3%	76.8%
論・表 I (R6)	64.0%	36.0%
論・表 I (R7)	29.4%	63.7%

①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有すると判断された生徒のうち、資格・検定試験の取得によらず、教員の見取りにより判断された生徒の割合が低下している。(R6:5.2%⇒R7:2.7%)

②CEFR A2/B1レベル相当以上の英語力を有するかを判断する根拠として、CAN-DOLISTに基づく自校でのパフォーマンステストの結果を活用していない学校が、調査対象校88校のうち51校、57.9%となっている。

2. 要因分析

①ALTの増員及び配置校の拡充により、授業内外において生徒がALTと英語でやり取りする機会が増加した。生徒が英語を実際に使用する場面が充実したことで、英語による言語活動が促進され、CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合の向上につながったと考えられる。

②ALTの配置数が増加したことにより (R6：89名 ⇒ R7：109名)、英語担当教師がALTと協働して授業を構想・実施する機会が増加した。その結果、教師自身が英語を使用する機会が増えるとともに、生徒の英語による言語活動を中心とした授業づくりが各校で進められたと考えられる。

①②

資格・検定試験によらず生徒の英語力を把握する際に、CAN-DOLISTに基づく自校でのパフォーマンステストの結果等を活用する取組が十分に定着していないことが要因と考えられる。特に、パフォーマンステストの設計や評価基準の共有、評価結果をCEFR A2/B1レベル相当以上の判断根拠として活用する方法について学校間で差があることから、教員の見取りによる英語力の把握が限定的になっていると考えられる。

3. 目標を達成するための施策・事業

○授業改善推進プロジェクトの実施 (①②①②)

- ・各校における組織的な授業改善を推進するため、生徒による授業評価、教員相互の授業参観、ICTや生成AIの効果的な活用等を通して、4技能5領域を統合した言語活動の充実を図る。
- ・CAN-DOLISTに基づく自校でのパフォーマンステストの設計・実施、ルーブリックによる評価、評価結果の分析・活用に係る研修や好事例の学校間共有を行い、生徒の英語力を適切に把握し、CEFR A2/B1レベル相当以上の判断根拠として活用する取組を促進する。

○授業内外でのALTのさらなる積極的活用 (②①)

- ・ALTの増員及び重点配置校への複数配置により、生徒が英語でやり取り・発表する機会を拡充する。
- ・ALT活用協議会等を通して、英語による他教科指導、パフォーマンステスト補助、ディベート指導、プレゼンテーション指導等の好事例を共有する。

○スペシャリストを対象とした特別選考

ALT経験者等をネイティブ教諭に登用（特別免許状）し、専門性を活かした教科横断型授業の展開

○英語担当教員の英語力の向上

教員の指導力向上を図るため、外部資格試験の受験機会の提供および受験支援

・R8 CEFR B2レベル以上未取得者対象TOEIC IPテスト受験

○英語での発信力強化に向けた事業の実施

・英語プレゼンテーションフォーラム

○いばらき海外留学支援事業



プレゼン



留学

改善が進んだ点

未だ改善が必要な点

茨城県教育委員会

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
高等学校	①CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		50	50.9	55	49.7	60	51.4	62		65	
	①CEFR B1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		24	19.4	26	20.6	28	23.2	30		32	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		50	43.8	50	45.3	55		60		65	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		70	42.5	70	46.7	75		80		85	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	100	100		100		100		100	
		公表（％）	50	53.8	60		65		70		75	
		達成状況の把握（％）	50	70.2	75		80		85		90	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		84	85.2	86	88.7	92	91.9	100		100	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		50	30.6	50	29.1	55	23.7	60		65	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
中学校	①CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合（％）		55	53.2	55	56.2	57.5	52.2	60		62.5	
	②授業における、生徒の英語による言語活動の割合（％）		90	85.7	90		93		96		100	
	③スピーキングテストとライティングテストの両方を実施した学校の割合（％）		100	99.9	100		100		100		100	
	④「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	100	99.1	100		100		100		100	
		公表（％）	80	76	80		83		86		90	
		達成状況の把握（％）	90	89.5	90		93		96		100	
	⑤CEFR B2レベル相当以上の英語力を有する英語担当教員の割合（％）		37.5	33.6	70	41.1	100	44.6	100		100	
	⑥英語担当教員が授業における発話の半分以上を英語で行っている割合（％）		90	78.8	80		87		94		100	

校種	指標内容		2023		2024		2025		2026		2027	
			目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値	目標値	達成値
小学校	「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の整備状況	設定（％）	95	98.9	100		100		100		100	
		公表（％）	60	68.6	70		80		90		100	
		達成状況の把握（％）	85	95	98		100		100		100	